

ラガーディア大学

ラガーディア大学側の参加者

ラガーディア大学学長

ラガーディア大学副学長

トニー氏：PDA (Program for Deaf Adult) のディレクター

キム氏：アカデミックコーディネーター

キャサリン氏：PDAのアシスタントディレクター

ロブ氏：手話通訳養成科のディレクター

ジェイソン氏：手話通訳科のコーディネーター

ジェーン氏：通訳派遣のコーディネーター

スー氏：基礎クラス担当

ディズリー氏：NETACのサイトコーディネーター

．副学長あいさつ

皆さんをお招きすることが出来たことを大変光栄に思い、また感謝しています。

私たちと同じ思いをもち、同じような仕事をしている方たちを日本から、呼ぶことが出来て嬉しく思います。私は、皆さんの実績に対して好印象を持っています。皆さんがPEN インターナショナル及び日本財団と共に活動をしてきたことに関しては、素晴らしいことだと思ふ。

今日の午後には、ラガーディア大学学長と会う予定です。学長は、ろう者に対するサポートサービスへの理解、また国際的な活動に協力的な方です。

大学のキャンパス内を、歩くと気づくと思うが、多くの留学生を見かけるだろう。私たちの大学のプログラムには、日本からの留学生も多く在籍している。また日系アメリカ人も多く在籍しており、学士取得を目指してがんばっています。

私は、ろう者のために力を注いでいる私たちのスタッフに感謝し誇りに思う。

今日は、私たちからお土産を用意しました。きっと、今日の訪問をずっと覚えていてくださると思う。ラガーディア大学においていただきありがとうございます。

．ラガーディア大学の概要

(PDAのプログラムディレクターのトニー氏より)

ラガーディアコミュニティーカレッジや、ニューヨーク市立大学について、また成人ろう者向けプログラムの概要の説明をします。

ラガーディアコミュニティーカレッジは、1971年に設立され、PDAのプログラムは1975年に作られた。ニューヨーク市立大学は19の大学で構成されており、在籍総数は218,000人、キャンパスは市内に点在している。ニューヨーク市は、マンハッタン、ブロンクス、スタテンアイランド、ブルックリン、クイーンズの5つの行政区に分かれている。皆さんは、今クイーンズにいる。

19の大学の中の1つがラガーディア大学で、12の学科がある。3つの学位(準学士・準理学士・文学士の編入プログラム)と31のプログラムを備えている。この大学は、国際的であり、また学生は159もの国から来ており、110もの異なった言語が使用されている。このように大多数が移民者である。在籍する学生は、準学士コース13,000人、生涯学習コース23,000人である。

．キャンパスツアー

1．PDAのオフィス見学

2．サインランゲージラボ

(ロブ氏、ジェイソン氏より)

このラボは州の拠出で設立され、ASL及び英語通訳の訓練のために使用されている。ここは、2年間のプログラムであり、資格取得も可能で、学士取得のために4年制の大学に編入するための単位を取得することも可能である。また準学士のコースでろう教育を専攻する学生もASLを取得するためにこのラボを使っている。

このラボは、手話から英語に換える、すなわち視覚的言語から音声的言語に換えなければならないので、それに合わせてラボを作った。これまでラボを製作してきた会社は、音声言語から音声言語へ変換するためのラボを製作していたので、ここはユニークなラボと言える。

このラボでは、手話のビデオやDVDを借りることも出来、学生は画面を見ながらヘッドホンを使い、自分の声を録音し通訳練習が出来る。それとは別のオリジナルテープでは、既に通訳した内容がテープに組み込まれているので、自分が通訳した内容と比べることが出来る。またASLのビデオを見て、自分の声を録音することができる。その後、自分の声と映像を確認することも出来る。その他に、通訳者が行なう見本のビデオがあり、それを見ながら自分のやった内容と比べることも可能である。

様々な訓練に対応するために、ラボは変化している。例えばプライバシーを守るために壁が出来たり、照明の位置を工夫するなど、学生が学習しやすいようにいろいろ工夫して作られている。

通訳のトレーニングは、先ず、2人1組のペアで練習した後に、クラス全体で見せ合い、どのようにしたら良い通訳が出来るかディスカッションをしている。再びペアに戻り、通訳をもう一度やってみる、といった方法を行っている。

教員用のビデオは、全ての学生の画面とつながっていて、先生がひとつのビデオを入れれば、全ての画面に流れる仕組みになっている。

また、先生のメインコンピュータからは、例えば3番の学生がどのような通訳をしているか見たいときには、3のボタンを押すと、その学生の通訳の内容を確認することが出来る。

質問：ここにあるコンピュータはどのように使うのか？

答え：全てのブースにコンピュータがある訳ではないが、後々増やしていく予定である。学生の中にはコンピュータが得意な人と得意でない人がいるので、得意な人はカメラを操作したり、通訳の練習をコンピュータを通して行うことが出来る。コンピュータでは、VHSのビデオテープを使った練習も出来るし、CDを使った練習も出来る。

質問：通訳の養成クラスに入るには、事前にASLを知っていないといけないか？

答え：もちろん入るには、ある程度の手話の技術がないといけない。通訳が出来るほどのものすごい技術までとは言っていないが、ある程度の技術は必要とする。

手話がそこそこだからといって落とすのではなく、受け入れる態勢は取っている。そうした方にはより多くのトレーニングや指導をするようにしている。

私たちの考え方は、通訳を勉強するにあたっては、英語と手話をしっかり勉強していて、通訳のプログラムに入る以前にろう文化であるとか、聞こえる人の文化の両方を理解している必要があることが求められる。

質問：通訳養成科に入るにあたってテストや技術評価があるのか？

答え：通訳養成科に入るにはいろいろ必要なものがある。まず必要書類を書かなければならない。その次にエッセイ。自分がこのプログラムで何をやりたいのかをエッセイに書かなければならない。その他に自分が手話をしているところをビデオに撮ったものを一緒に提出することになっている。それがこちらのプログラムに届くとスクリーニングという手順があり、ろう者と聴者が一緒にビデオを見て、その生徒が通訳科に相応しいかどうかを判断する手順になっている。

書類のほかに、実際にその生徒と面談し、手話の技術を確認する。例えばビデオを見せて、同時通訳をさせてみる。また絵を見せて、例えば立体的な3Dのような絵を見せてそれを手話でちゃんと現わせるかどうかを見る。またその場でその学生の英語能力も確かめている。

また、様々な話をして、ろう者文化、手話に対してどのような姿勢をもっているか、どのような態度で望んでいるのか自体も具体的に評価している。もちろん通訳養成科に入るにあたり、ろう者文化に対する理解、姿勢も大切な要素である。このように手話通訳技術そのものは必要とはしていませんが、姿勢は重視している。

また手話通訳技術だけでなく、手話能力と英語能力を評価している。こうした書類、テストを行なって、生徒を選んでいく。

選ばれなかった生徒に対しては、ろう文化との交流などをすることを勧め、次年度通訳養成科に応募してくるようにアドバイスをしている。

質問：財政的なことについて。州からの補助金で出来ていると聞いたが、古くなった施設を定期的に更新できる費用がもらえるシステムになっているのか？

答え：州からこうしたラボに対する助成金を得ることは難しい。お金は、機材よりも制度やサービスに使われることが多いから、機材に助成金が出たことはとてもラッキーでした。

ジェyson氏より質問/皆さんの大学ではこのようなラボは使っているのか？

答え：筑波技術短期大学にはない。

ジェyson氏/それはお金、助成金が出ないからか？

私たちは、このラボを作るにあたっては、3年前からリサーチを行ない、1年半前に出来上がった。今またリサーチを行なうとしたら、マイクはワイヤレスにするなど、機材の値段を押さえることが出来たかも知れない。

質問：ディスプレイに映像が写っているが、このソフトは学校独自のものか、外で作られたものか？

答え：今皆さんが見ているビデオと言うのは、手話通訳養成科の学生が入学してきて1年目に勉強する、手話の文法の構造がどうなっているか勉強するためのビデオです。このビデオはカリフォルニア州にある、ツリーハウスという会社で作られたもの。

質問：ニューヨーク市内では、このラガーディア大学が通訳養成に関して最も力を入れているのか？ほかの大学でも同じような取り組みをしているのか？

答え：そう、ニューヨーク市内では、ラガーディア大学が一番進んでいる

質問：他の州には通訳養成クラスはあるのか？たとえばロサンジェルス州で。

答え：確かに手話通訳養成科というのはアメリカにはたくさんあるが、ほとんどが2年制の準学士のプログラムであり、通常は、1年目にASLの勉強をして、更に2年目に通訳の勉強をすることが多いので、実際あまり通用しないというのが現状であろう。

もちろんその他にも、素晴らしい通訳養成プログラムをもった、養成科をもった学校もある例えば、ボストンにあるノースイースタン大学、オレゴン州にあるウェスタンオレゴン大学、もち

ろんギャローデット大学などすばらしい学校もある。

質問：特にカリフォルニア州、ロサンジェルスあたりには、よいプログラムをもった通訳科のある大学はあるか？

答え：カリフォルニアには二つの学校がある。一つはC S U L、ノースリッジ大学。もう一つはピアスカン大学。

その他の大学で、ノーザンコロラド大学では4年制の通訳課程で学士を取得できるようにしようという動きがある。その大学では遠くにいる人でも、オンラインをとおして通訳科の勉強で学士が取れるように検討している。またさきほどの、ノースイスタン大学ではA S Lの手話通訳を教える講師を育てる、修士を取得できるところ。

質問：学生がカメラで撮影され、講師がコントロールパネルで見ることができるとの説明があったが、見ることは出来るか？

(席の数だけあるスイッチで切り替えるだけの単純なシステム。)

日本でもアメリカでも同じですが、手話と通訳の技術を同時に学習しているので、技術的なことでアメリカでも日本でも同じようなことが起っていると思う。

ラガーディア大学側より質問：アメリカにはR I Dという通訳の教育に関する統一した基準を作成している組織があるが、日本には通訳養成を統一している組織というのはあるのか？

答え：ある。

ラガーディア大学側より質問：もし通訳の資格を持っていない人も、通訳の仕事は出来るのか？

答え：日本には都道府県毎の資格というのがあって、それを取れば仕事は出来る。

ラガーディア大学側より質問：日本に手話通訳養成の学校はたくさんあるか？

答え：正式な学校は数校しかないが、他に教えているというところはいくつかある。通訳養成をしている学校はあっても、ほとんどは手話の1レベル、2レベル、くらいの内容までしか教えていない。ろう者と交流して技術を学ぶ場はあるが、正式に通訳養成科という学校はない。

質問：修士の通訳科はあるのか？

答え：現在アメリカには学士のレベルでの通訳科はある。ギャローデットには通訳養成科での修士が取れるが、他の大学ではほとんどが学士レベル。

3. 図書館 (メディア・センター)

授業に必要な字幕付きビデオやC Dの検索を行なっている。

また家にコンピュータがない学生のためにコンピュータを1台用意してある。その他に学生が使えるコンピュータはあるが、どこも順番待ちの列がある。

4. 劇場

二つの劇場 (定員200人と250人) を備えており、オリエンテーションや授業に利用されるほか、講演会や学生演劇部の公演、外部の演劇公演等も行なわれている。その際には手話通訳字幕や文字によるサポートサービスが提供される。用途に合わせて大小の劇場を使い分ける。

質問：劇場を使うクラスはたくさんあるのか

答え：演劇関係、音楽関係のクラスは利用することは多い。

質問：手話のサポート以外に、字幕や文字によるサポートも行っているのか。

答え：勿論。スクリーンに字幕を映したり、外部のCプリントやカートの技術者を呼びサービスを提供している。

質問：廊下の天井から吊り下げているディスプレイに表示される情報は、何か？

答え：LCDはろう学生だけのためではなく一般の学生のための情報提供。キャンパス内で起こっていることなどを伝える。

質問(続き)：聴覚障害学生に役立つ日々の情報、緊急のものだけでなく、日々のスケジュール、教室が変わったとか、呼び出しなどにも使われているのか。

答え：可能なことかもしれないが、実際行われているかは分からない。教室変更の場合は、もともとの教室の前に紙を貼って伝えている。

5. 廊下の公衆電話にTTY

6. ろう者対象の準備クラス

英語の読み書きの力を身に付け、実際に単位を取得できるクラスに入るためのクラス。

7. その他

子供を持つ学生のための保育園が大学内に用意されており、学生は一日中子供を預けて学習に専念することが出来る環境が整えられているとのこと。プールは学外の人たちにも利用されており、年配のご婦人の姿が見受けられた。

. 学長あいさつ

皆さん、ようこそ。皆さんが来てくださったことにとっても興奮し、嬉しく思っています。

ここにたくさんの通訳の方がいて、それぞれのコミュニケーションが移り変わっていく様子を見て興奮している。

ディズリーさんに日本の手話ができるのかどうか訊ねたが、「知らない」との答えだった。

私は、このプログラムにとっても満足しており、誇りに思っている。この大学には大勢の留学生が、150もの異なった国からここに学びにきている。今日思ったことだが、ろう者のコミュニティーもインターナショナルの留学生と同じグループの一つに数えられるのではないかと思う。通訳がそれぞれ、いろいろなところでいろいろな通訳をしているのを見るのは初めてのことなので、あちこちに目がいつている状況です。

私が日頃行きたいと思っている国の中に日本がある。それが何故なのか説明したい。私は小説を読むことがとても好きだが、小説の中でも特に日本の小説が好きです。最近読んだ小説の中に、村上龍さんの「海辺のカフカ」という本がある。皆さんもご存知ですか？彼が最近書いたお薦め小説です。書かれている内容と言うのは、昔の日本と今現在の日本がうまくつながっているような話でとても興味深い内容になっている。夢が叶って日本に行くことが出来るのであれば、皆さんを訪問したいと思っている。

ここにいるスタッフを大変誇りに思っています。最近出来たASLラボについては、これまで私たちが行ってきたものの中でも素晴らしいものの一つである。ASLラボのようなテクノロジーが、学生同士を引きつけて、手話に興味を持ったり、ろう者の文化に興味を持ったりすることになって

いるので、素晴らしいことだと思っている。

質問：私たち日本各地で高等教育に関わるメンバーのために、たくさんの専門家の方たちと準備をしていただいております。

学長：「ありがとう」だけは分かります。

質問：どのようなお考えで、どのようなろう・難聴者の人たちを育てたいと思われているのか？

学長：私たちが持っている哲学のようなものは、参加型。ろうの学生が全てのことに参加できるような環境を与えるということ。ですから私たちが行なっていることは、全てのことにアクセスできるような、全ての人が参加できるような環境を作ること。

それと、もちろんろう文化を学校内で保っていくこと。そうすることによって、ろう学生が安心して学校生活を送れるように、ろう文化を学校のキャンパスの中でも保つための場所を提供することではないかと考えている。

一番難しいのはお金の問題。そこにバリアを感じる。

質問：今おっしゃっていただいたように、ベストの環境を与えることが、やはり聞こえない人の力を最大限伸ばすことだと思っている。共感する。

学長：ろう学生は、学校生活で厳しいことに直面しているので、私たちの学校でも、聞こえる学生と同じ位成功しているかと言われれば、そうではない。私たちが期待するほどにはまだ成功していない。ですから、私たちの理想を実現するために、いろいろと働きかけを行なっているところです。どうもありがとうございます。

. PDA (Program for Deaf Adult)

(トニー氏より)

私たちのプログラムは1975年に成立しました。資料に基本的な情報は載っているが、一つは「PDAについて」、二つ目は「サポートサービスについて」、三つ目は「ろう・難聴者を対象にした生涯学習について」で構成されています。

この学校は7月1日に始まり翌年6月31日までが年間のスケジュール。2003年と2004年の統計では、PDAのサービスを受けた学生は1,650人であり、その中には、学士取得を目指す31人が含まれている。101人の成人ろう者が生涯学習で学び、195人のろう・難聴が、通訳養成科や通訳に関するワークショップに参加している。106人の健聴学生がASLのクラスを受講し、1021人も学生のASL関係または通訳関係のワークショップに参加したということになっています。

PDAの中にもいくつかコースがあり、その一つが学士取得のために学ぶ学生のためのものもある。担当のキム氏が指導にあっている。ジェーン氏が通訳派遣に携わるコーディネーターを務めている。もう一つのプログラムが生涯学習で、そのアシスタントディレクターがキャット氏さん。この大学には手話通訳養成科があり、2年間のプログラムで養成し、また通訳のワークショップも実施しています。通訳科のディレクターがロブ氏です。

PDAのプログラムが複数ある中で、最後の一つがNETACである。ディズリー氏が担当しています。

1. サポートサービス (キム氏より)

私は、サポートサービスのコーディネーターを担当。アカデミックカウンセラー (学生指導員) です。実際に関わる学生は、ろう学生、難聴学生、盲ろう学生です。学生は全米から集まり、また

留学生も大勢いる。この大学の受け入れ条件は、高校を卒業していること、または他の大学で取得した単位を移行することも可能である。そうした学生と初めに会う。コミュニケーションも取りやすく、ジェーン氏や他のスタッフが一緒に話をすることもある。

サポートサービスでは、通訳の派遣、ノートテイクやチューターといったサービスを受けることができる。サポートサービスを提供する理由は、この大学はインクルージョンの状況であり、ろう学生が成功していくためにはこうしたサービスが必要であるからです。

(ジェーン氏より/通訳のコーディネーター担当)

日本の状況は分からないが、このような環境、サポートできるサービスがあることを幸運に思っています。ろう学生も聞こえる学生と同じように、平等に講義を受けられるサポートは法律で義務付けられている。法律でいろいろなサービスを提供しなければならないとされているが、このラガーディア大学を特別なものにしてあるもの、学長から話があったと思うが、ろう学生が聞こえる学生と同じように、どのサービスにも平等にアクセスできる、というところにある。

サポートサービスの内容は、

1) 先ず学生はアドバイズメントを受ける。

ここでは学生と、長期的な目標は何か、専攻する科目によって何を履修するか、などを話し合う。

2) 基礎的なリーディング、ライティングのクラス

始めは、スキルアセスメントテストを行う。これはCUNY (City University of New York) にて作成したテストで、その後45時間の授業を受けて達成度を測るための次の学力テストが課せられる。それは理解力を問うテストであり、テストの結果が65点以下だった学生は、基本的な読解力・筆記力のクラスの受講が課せられる。

白澤記録: アセスメントテストを受験 65点以下 45時間のクラス受講 ポストテストを受験 (CUNY Skills Assessment)

私がこの大学に来たのは1985年。それ以前にはこうしたテストがなくて、ろう学生はいきなりメインストリーミングに配置されてしまうので単位を落とすことが多く、落第する学生が多かった。大きな違いは、聞こえる学生が持っている読解能力・筆記能力と、ろう学生が持つ能力とは違っている。また先生が何を言ったのか、理解力も違っている。ノートを取れないという学生には時間を与えてノートを取らせる。大切なことはどのASLがどの英語に対応しているのか、をしっかりと教えている。

学生のレベルに合わせた教材を使い指導している。リーディングのクラスでは学生が読んだ内容について文法に重点をおくのではなく、要点をつかんでいく形で授業を進めている。ライティングのクラスでは文法に重点をおいている。

X-WORDグラマーというのは、1971年にコロンビア大学で作られたもので、英語の文法を簡潔にまとめたもの。一つはbe動詞、例えばam, wasなど20の動詞を教える。その動詞を使って否定文を作ったり、この主語にはこの動詞を合わせる、といったこと。

ろう者のための筆記能力を高めるクラスでは、たくさんのエッセイを書かせている。書いたものに更に書き足したり、間違ったところは直す作業をしている。

私が担当しているクラスと、普通のメインストリーミングのクラスとの違いは何かと言うと、私のクラスでは、学生に自主性を持ってもらい、積極的に参加させている。一方メインストリーミングでは、普通は先生の言うことを聴いてあまり参加型ではない。特にろう学生のために基本的な学力を身につけさせるクラスでは、学生の積極性、自主性に重点を置いている。

質問：資料にSAT (Skills Assessment Test) とあるが、1985年以前にはSATなどの試験に関係なく入学を許すことがあったのか。また今、試験に関係なく入学することは可能か。

答え：1985年以降は違う試験を行っており、今はSATに代わってACT (American College (?) Test) を行っている。大学に入学するためには、このACTを必ず受けないと入学できない。

ここにあるACT (CUNY - ACT) とは、高校生が大学入学のために受けるACTとは異なる。名前が同じACTでも、特に読解力を確かめるためのテスト。

質問：LD (学習障害) をもった学生が入学することはあるのか。

答え：学習障害を持つ学生も同じ試験を受けて、その結果によって決まる。私のクラスに入るにあたっては、一般の聞こえる学生の2倍の試験時間を設けて受験させている。

もう一つの試験は卒業に必要な試験。私が誇りに思っていることは、私のクラスの5人のろう学生がCPEという試験に合格したこと。

3) 手話通訳

通訳の派遣をしているところは、メインストリーミングの学校の中で、ろう学生が行われていること全てにアクセスできることになっている。通訳の派遣は授業以外にも、ろう学生が必要とするのであれば、教員と1対1で話をしたいときや、グループ学習、キャンパス内で行なわれる様々なイベントに通訳が必要と思われたときには私たちがサービスを提供している。

通訳の必要性というのはとても大きなことなので、キム氏と相談して、全てのろう学生が通訳を受けられるように、サービスを提供している。

4) ノートテイク

通訳以外に重要なサービスがノートテイクである。ろう・難聴の学生は手話通訳を見て講義を受けているが、ノートをとるときに目を落としたときに何かを言われても分からない。そのためにノートテイクが必要になる。

ノートテイクは、ろう学生と同じクラスをとっている学生にお願いして、その学生にはお金を支払い、ノートテイクという仕事をやってもらっている。

ノートテイクの学生にはトレーニングを課している。それはNTIDが立上げられたオンライントレーニングを活用している。ノートテイクの方々にはノートテイクをするにあたって、ろうの学生に関して、ろう文化に関して、事前に知識を持つことになっている。ノートテイクというのはローテクノロジーであるが、最近新しい電子機器を使った、ノートテイクという試みも行なっている。

5) C-PrintやCART

電子的なノートテイクの中には、C-PrintやCARTという新しいサービスがある。これらはコンピュータを使ったサービスであって、ろう学生がラップトップ・コンピュータを使ってクラスで行なわれている情報を得ることが出来るようになっている。

しかし今、C-Printが出来るキャプショナーの数が少ないので、将来的にはその数をもっと増やして、C-Printのサービスを拡大していこうと考えている。

6) チューター

1対1で学生に指導を行なう。チューターという人は、手話を知っていて、それぞれの分野に長けており、普通はだいたい学士を持っている方。社会学・数学・英語といった様々な分野のチュー

ターという方が存在する。全ての学生にチューターが必要かというわけでもないし、また強制的でもない。学生がもし数学が苦手というときに、先ず私のところに来て、私がチューターを探して学生に提供している。

7) API (Academic Peer Instruction)

難しいコースをとっている学生のためには、APIという特別なチュータープログラム、学習指導プログラムが用意されている。

APIは、先ずAPIリーダーが、ろう学生と一緒にクラスを見に行く。その後でリーダーと学生がクラスの状況を確認し、どのように勉強していったらよいかを話し合う。ろう学生がクラスに2~3人いる場合もある。

質問：APIリーダーは学生か、学生ではないのか。

答え：学外から雇う場合もあり、時には学生の場合もある。例えば化学の分野であるとする、その分野の知識に長けた人が担当する。ろう学生と相談するときはもちろんコミュニケーションは手話。

APIというプログラムは健聴学生のためにもある。その場合のAPIというのは、学生が履修している分野で優秀な成績をとっている学生がリーダーになる。

ろう学生のAPIというのは、健聴学生のAPIをモデルにして活動しているが、学外からリーダーを選ぶこともあり、ときには優秀な学生を雇って行なうこともある。

私が思うに、APIというプログラムはとても成功していると思う。APIを活用した学生は落第することなく、ちゃんとクラスについていっていることが分かっている。

8) 試験の際の配慮

例えば時間延長などを申し出る。

9) FMシステム

難聴学生にもいろいろなサービスを提供している。難聴学生に対しては、FMシステムといった補助的な機器があり、小さなマイクを先生のジャケットの襟に付け、しゃべった内容が学生のレシーバーに大きな音になって伝わるもの。

10) 字幕

教室内で必要とされるものは、ビデオテープ、DVD、字幕といったものがあげられる。先生は古くて字幕のついていないビデオテープを使うことがあるが、字幕付きのものを使用するように言っている。

字幕付きというのはろう・難聴学生だけが必要というわけではなく、ラガーディア大学にはいろいろな国から大勢の留学生が来ているので、そうした英語を第2言語としている学生にとっても有効なものになっている。

11) ジョブ・デベロップメント

大学を卒業して職を探す際に、みつけ方や履歴書の書き方などを教えている。

質問：ノートテイクについて。NETACがはじめたオンライントレーニングを、昨年の夏から受けているということだが、それ以前はどのようにしていたのか。

答え：このトレーニングが始まる前は、何もなかった。先生がクラスをどの学生がとっているかを見つけて、先生に聞いてアシスタントをしたりとか、以前にそのクラスをとっていた学生がノート

テイクをしていた。

質問：ノートテイクサービスの中には手書きだけでなく、CART、C-printなどの形があるが、CARTはほとんど使っていないで、C-printがよいので使っていると資料にある。何故C-printを選んでいるのか。

答え：C-printのほうがCARTより効果的であるということがあげられる。

というのも、サインを使わない人にはC-printやCARTのような文字情報の方が効果的に情報を得られるが、CARTは話したことを全てが文字化されてくる、C-printは要約して出てくるものなので、C-printのほうが学生にとってはわかりやすい。

例えばCARTで打ち出されたものが60ページあるとすると、それに対してC-printで打ち出されたものが20ページ。それを読む際にしても20ページのものを読んだほうが効果的であるし時間も取られない。

もちろん、講義で教官が話した全ての言葉を知りたいという要望から、より高いレベルの講義をとっている学生の場合は好んでCARTを使っていることもあるだろうが、短期大学ではCARTを必要とするほどのクラスはないので使っていない、ということになる。

質問：学生の読み書き能力に合っているから効果的、ということか。

答え：そのようなことが言えると思う。学生の学習能力が合っているから、C-printのほうが効果的だと考えている。

質問：教えているインストラクターはどのような人たちなのか。手話に熟達して専門の内容も分かっている人が教えているのか。

答え：そう。もちろん手話を知っている人であるし、それが先生を雇うときトップの必要条件になっている。コミュニケーションが大切なものなので、手話を知っている人が、ということ。

2. 生涯教育（キャサリン氏より）

成人ろう者のための学習を提供している。この生涯学習は、ろう者のためでもあり、聞こえる人のためでもある。生涯学習は3つのカテゴリーに分けることができる。1つは、学習能力の向上。筆記・読解力などの技術を向上させるというもの。2つめは自己能力を向上させるための内容。3つめが手話プログラムである。

例えば学習能力向上のためのプログラムでは、学生一人一人経歴により読み書きの能力は異なる。また外国から来た学生の中には、自国では優秀であったのに、初めてアメリカに来てコミュニケーション障害に直面する学生もいる。こうした学生のために、大学のプログラムに入ってきたときは、まず学生の能力、レベルを計り、その学生に何が必要かをしっかり見極めて似合ったサービスを提供し、大学に入学できるような能力を身に付けさせるように指導している。

また、高校を卒業していない学生のためには、高校卒業のテストを再受験し、合格すると大学に入学できるようなプログラムを提供している。こうした学生には1対1またはグループ指導も行ない、将来の方向に付いて相談、指導を行なっている。その他に学生たちが市民権を得るためのテストについても指導している。以上のようなことから、提供しているプログラムは、タイピングのクラス、コンピュータ技術を学ぶクラス、運転のクラス、など様々な内容である。

ろう者は州からの助成金を得て学ぶことができるようになっており、聞こえる人でも他に障害がある人、例えばアルコール中毒のような科学物質の中毒者、にも州から助成金が払われることがある。

3. 手話通訳養成科(ジェイソン氏より)

通訳養成科には州からお金が出て、2年間のプログラムになっている。学生の学費は無料だが、卒業後の義務がある。それは卒業後2年間(12,000時間/年) 病院など通訳を必要とする場に派遣される義務。例えば、州から助成金を受け手話通訳科に1年間在籍した学生には、1年間というのは1,200時間分が加算される。1年間無料で学んだ学生は、1年間1,200時間働かなければならないということ。2年間手話通訳科で学んだ学生の場合は、この2倍の2,400時間(卒業後2年間)働かなければならないことになる。

質問：州から助成金があるということということだが、学費相当分を補助してもらい教科書代だけをだしてもらおうのか、お金をもらうのか。それに対してあとで働くということか。学生の時にもらうと言うのは、ちょっとした生活費ももらうということなのか。

答え：学費だけに対して支払われる。学生生活に対するサポートは支払われない。私たちの大学には寮というものがないので、学生生活を支援する助成ではなく、学費だけを援助している。

手話通訳科の学生に必要な要件は、先ず準学士の取得が必要。そしてモチベーションがとても大切。ろう者と交流する、ろう文化からたくさん学ぼうとするモチベーションを持っている人が資格要件になる。(既に手話を習得している人に通訳技術を教えるコースであるため、後で説明するように手話技術も必要)

また学生には2つの選択肢がある。1つは、通訳養成科で2年間学び資格を取得する方法。もう1つは、私たちの大学はエンパイアステイトカレッジと提携していて、ここでの2年間の学習後そちらに編入する、そこでは学士取得も可能。

手話通訳クラスは1レベルから6レベルある。その中で通訳の仕方を学ぶ。例えばASLからASL、ASLから英語、またその逆もあるように、いろいろな手話通訳の手順を学ぶ。このコースの中では、ASL言語学や社会言語学も学び、手話通訳を行なう上で、ASLが環境によってどのような使い分けがされているか、そのようなことについても学習する。

アメリカにはRID(The Registry of Interpreter for the Deaf)という手話通訳を統制する機関があり、学生にはそこが実施する資格試験を受験させており、その際の実験料は大学が負担している。そして手話通訳養成科を卒業した人が、卒業後も手話関係に携わっていけるように、プロフェッショナルなものを提供している。

通訳科の紹介(黄色の資料)と、入学の資格(白色の資料)には、エッセイやビデオを提出しなければならないことなどの情報が載っている。

質問：RIDの試験の合格率は？

答え：最近RIDの資格条件というのが変わりテスト内容が変わっているが、半分くらいは合格するのではないかと。資格条件が変わった後、全ての学生が合格できればいいなと思っている。

質問：定員は何人か。志望者は毎年何人くらいか。

答え：通訳科は2年間のプログラムで、今年目の学生は14名、2年目には9名。志望人数については、50~60人の応募がある。

その人たちが自分の手話をビデオに撮って送ってくる。それをスクリーニングプロセスといって、私たちがビデオを見て、技術があるかないかを見て、30人くらいに絞る。

次に、直接のインタビューを行なう。中にはインタビュー当日に来なかった人もいるが、そこでまた10~12人に最終的に絞り、その人たちが通訳科に入れる。

お分かりのように、手話通訳科に入るにはとても厳しい条件になっている。もちろん通訳科では手話を教えるということはない。手話を教えるのではなくて、手話を知っている人にどのように通訳をするのか技術を身に付けさせる場所あるから、そのためにスクリーニングプロセスで、応募者を絞る時には、手話の技術がある程度身に付けている人を選ぶことになる。

さきほども言ったが、州がお金を出してくれて学生はプログラムに参加できる。そしてその手話通訳科コースというのは、主に教育現場での通訳に関してのトレーニングを行なっている。

幼稚園から高校3年までのレベルの教育通訳に関して、教育現場での通訳に関してのトレーニングを行なっている。だからこそ、卒業後の2,400時間という手話通訳の仕事が、学費にあたるわけで、その時間というのは、教育現場で使われる時間ということになる。